

<あなたがた一同のために祈る度に、いつも喜びをもって祈っています。>(4)

1、フィリピの教会は使徒パウロにとって麗しい関係にあった教会だといわれています。パウロが伝道の困苦の生活にあったとき、物心両面で援助をした教会です(4:15-16)。パウロはこの書簡を記した時、牢獄に捉えられていました(1:13)。ですからこの書簡は獄中書簡と呼ばれています。

2、パウロが獄中だということで、フィリピの人たちはパウロのことを心配していました。当然の人情でしょう。指導者の不在が不安を招きました。しかし、パウロは「兄弟たち、わたしの身に起こったことが、かえって福音の前進に役だったと知ってほしい」(1:12)と激励します。彼らは「投獄は福音の前進」という、信仰の逆説の理解には至りませんでした。「病による母親の不在が子供たちをしっかりとさせる」という理解の様なものです。しかし、そこまでの感覚のない事をパウロは憂います。

3、パウロにとっては「あなたがたを覚える」ということは、実は、ただ配慮すること以上の事でした。その教会が「逆説の信仰」の豊かさに目覚めることを願った事でした。このことは、そこにまで導いていない、パウロの自分自身の牧会の限界と力不足の自覚と裏表していました。ある意味では自分の不甲斐なさの自覚です。喜ばしいことではないのです。私なども、一つの教会を長い間牧会してきて、その教会がたとえ表面上は問題なく成長しているようでも、各個人の「信仰の逆説」が豊かでない事を思うと、自分の無力さをつくづく思います。

4、パウロはコリント教会ならいざ知らず、フィリピの教会の逆説を宿さない直裁な、無垢な信仰のあり方を今一つ距離をおいて見えています。しかし、フィリピの人々たちに対して神は必ずあなた方の中で救いの業を成し遂げて下さるに違いないという確信を持っています(1:6)。

5、だから祈るのです。「わたしは、こう祈ります。・・・ほんとうに重要なことを見分けられるように」と。祈りは感謝、執り成し、祈願、そして懺悔です。パウロは「喜びをもって祈る」と言っていますから、フィリピの教会そのものの存在への感謝があるでしょう。しかし、それ以上にこの世的にはマイナスの出来事が「福音の前進」であるという逆説を宿した教会に成長することへの「執り成し」の祈りがあったと思います。パウロが伝道者として自ら味わっていた「信仰の逆説」がそんなにすぐ分かるとは思っていなかったでしょう。そういう意味では、パウロは麗しい教会との交わりにおいてもなお孤独です。しかし、彼らのために、祈るということが、自身にとってその孤独を破る喜びなのです。だから「喜びをもって」祈るのです。

6、「逆説」というものは、言葉や、説明で伝わるものではありません。また、自分自身の努力でも理解できるものではありません。霊の導きを受けて、経験と生活で納得するものです。例えば「弱い時こそ強い」「負けるが勝ち」「苦難をも喜ぶ」「貧しいひとたちは幸いである」。自分自身に対してさえも、まして相手がその様な信仰の境地に至る様にとは、祈る以外に方法はありません。「逆説の彼方」の祈りです。祈りが希望なのです。